

全日本実業団が10倍面白くなるコラム⑤
10000m競歩にリオ五輪代表が大挙出場
五輪初メダルを実現した日本競歩界の充実を目撃しよう

文：寺田辰朗

実業団大会の競歩はいつも、オールスターゲーム的に豪華な顔ぶれとなる。

今大会の男子10000m競歩にも、日本競歩界初の五輪メダルを獲得した荒井広宙（自衛隊体育学校）をはじめ、20km競歩の藤澤勇（ALSOK）と高橋英輝（富士通）、50km競歩の荒井、谷井孝行（自衛隊体育学校）、森岡紘一朗（富士通）とリオ五輪代表5人が出場する。女子20km競歩代表の岡田久美子（ビックカメラ）も同時スタートの女子10000m競歩に出場するので、代表6人が同時に長居競技場のトラックを周回することになる。

日本競歩界は昨年の北京世界陸上でも、谷井が50km競歩で銅メダルを獲得した。また、13年モスクワ世界陸上20km競歩6位入賞の西塔拓己（愛知製鋼）も今大会に出場する。そして、来年以降の代表入りを狙う選手も1人や2人ではない。日本競歩界の充実を物語るレースを、観衆は目の当たりにするはずだ。



●銅メダル荒井の凱旋レース

荒井の歩きは当然、注目される。だが、いくら銅メダリストとはいえ、種目は50km競歩である。今大会実施の10000m競歩では藤澤や高橋ら、20km競歩の選手が有利になるのも当然だろう。

しかし荒井は、今年2月の日本選手権20km競歩で3位。1時間19分54秒（日本歴代10位）と、50km競歩代表選手では初めて1時間20分を切った。荒井は長い距離のトレーニングを行うなかで、スピードも上がってきた選手なのだ。

この種目は日本記録保持者の高橋、歴代2位の鈴木雄介（富士通。20km競歩世界記録保持者）、歴代3位の松永大介（東洋大。20km競歩リオ五輪7位入賞）の3人が、38分台前半のタイムを持つ。歴代4位以下を大きく離しているが、荒井も自己記録は39分17秒66の日本歴代5位。スピードがある、と言っても間違いではない。

今大会でも高橋にハイペースに持ち込まれると、つくことは難しいかもしれない（これは荒井に限ったことではないが）。だが、荒井も一定の差で粘って歩くと予想できる。高橋や西塔など、前半から飛ばすタイプの選手がオーバーペース気味に競り合えば、終盤でペースダウンする可能性もゼロではない。そうなったとき、荒井が追い上げるシーンが見られるか。

フォームでは、腕振りに注目するといいかもかもしれない。日本陸連の競歩部長である富士通・今村文男コーチは、次のように話す。

「50kmの選手が大きく、力強く振る傾向があるのに対し、20kmの選手は少し抱えるように、コンパクトに速く振る。50kmの選手は長時間（試合では4時間近く）腕を振り続けたいといけないので、筋力トレーニングもより

行うようにしています」

リオ五輪ではその腕振りが、“まさかの展開”のきっかけになった。残り1kmを切ったところでカナダ選手と腕が接触した荒井が一度は失格と判定されたが、日本が上訴して判定が覆った。銅メダルのエピソードを思い出す観客も多いのではないかな。

●来年以降が期待できる高橋のスピード

高橋はこの種目の日本記録保持者であると同時に、20km競歩の今季世界最高記録も持つ。リオ五輪は「期待に応えたい、という思いが空回りした」（今村コーチ）ため42位に終わったが、そのスピードは世界で戦う上で大きな武器であるのは間違いない。

「オリンピックが終わってメンテナンスをした」（同コーチ）状況で、自身の日本記録までは難しいかもしれないが、序盤、または中盤から高速ペースに持ち込むだろう。

高橋のスピードは、地面からの反発を受け止める“股関節周りの堅さ”があるからだと言われるが、見た目でもわかりやすいのは「腕振りや、脚の振り出しの速さ」だと今村コーチは言う。長居で高橋の“速さ”を見ておけば、ロンドン世界陸上など来年以降の国際大会観戦への興味も増す。

高橋が全日本実業団の優勝候補筆頭であることは確かだが、「五輪代表が必ず勝つとは限らない」と、今村コーチは言う。去年は西塔が、同学年の高橋に食いついた。6位入賞したモスクワ世界陸上以後は故障に苦しむなどした西塔だが、復調のきっかけをつかむレースとできた。

小林快（ビックカメラ）は昨年の国体10000m競歩優勝者で、スピードはあるが平均ペースで押して行くタイプ。昨年3月には20km競歩で日本歴代5位をマークしている。丸尾知司（愛知製鋼）は20km競歩で日本歴代7位。この2人もV候補といえるだろう。

今村コーチは全日本実業団への期待を次のように話す。

「リオに出られなかった選手たちは、来季に向けたレースと考えているはず。1カ月後の高島（全日本競歩高島大会。50km競歩がロンドン世界陸上選考レース）に向けて準備をしている選手もいます。リオ五輪代表に勝ちたいと思って臨む選手もいれば、自己新を目指す選手もいて、しのぎを削る展開になるでしょう。五輪直後でモチベーションに差は生じますが、それぞれの目標に向かって第一歩を踏み出す大会です」

リオ五輪代表同士の争いになるかもしれないし、代表になれなかった選手が勝つかも。その戦いが激しいほど、日本競歩陣の層の厚さを示すことになる。

●世界一へのスタートライン

日本競歩界は1990年代に、今村コーチが50km競歩で世界陸上に2度入賞した。だが、継続して入賞者を出すようになったのは、山崎勇喜（長谷川体育施設。現自衛隊体育学校）が五輪競歩種目初入賞を果たした2008年から。その後は以下のように五輪&世界陸上の全大会で入賞を続けている。



08年北京五輪：男子 50km 競歩 8 位・山崎勇喜
09年ベルリン世界陸上：女子 20km 競歩 7 位・瀧瀬真寿美
11年テグ世界陸上：男子 20km 競歩 8 位・鈴木雄介
〃：男子 50km 競歩 6 位・森岡紘一朗
12年ロンドン五輪：男子 50km 競歩 7 位・森岡紘一朗
13年モスクワ世界陸上：男子 20km 競歩 6 位・西塔拓己
15年北京世界陸上：男子 50km 競歩 3 位・谷井孝行
〃：男子 50km 競歩 4 位・荒井広宙
16年リオ五輪：男子 20km 競歩 7 位・松永大介
〃：男子 50km 競歩 3 位・荒井広宙

谷井の北京世界陸上は競歩界初の五輪&世界陸上のメダルで、谷井は 14 年仁川アジア大会でも日本初の金メダルを獲得している。また、鈴木が 15 年 3 月に 1 時間 16 分 36 秒と、これも日本競歩選手では初の世界記録をマークした。

リオ五輪で銅メダルを取った荒井が、次のように話していたことが印象深い。

「今の自分は、日本の競歩界の中で強くさせてもらっている。今回はたまたま、自分にメダルを取る役目が回ってきたのだと思います。僕自身、4年後の東京は今回より上のメダルを取りたいと思っていますし、日本の競歩界が世界一を取るためのスタート地点に立った。それが今回のメダルの意味するところだと思います」

それだけの力を蓄えた日本競歩界が、リオ五輪後の第一歩を長居に記す。